

2016年度教師海外研修(パラグアイ) 研修報告書

学校名	大同大学大同高等学校	氏名	市江 文奈
-----	------------	----	-------

<印象に残る写真2点>

●写真1 [2816]

この笑顔を待っていた！

イグアス日本語学校高等部の生徒。一見クールな印象に、仲良くなれるか不安で急ぎょ授業を作り変えた私。でも、どんな質問も喜んで答えてくれたし、沢山の笑顔くれた。素直で優しい子どもに元気をもらった。



●写真2 [6394]

Mi favorito ♡

色鮮やかで繊細な「ニヤンドウティ」。人の手によって糸を1針ずつ縫い合わせて作るという、なんと長時間と労力のかかる作品。こんな素敵な作品を作るパラグアイの職人さんを心から尊敬する。



1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

英語教員である私は、日々の授業で子どもたちが世界へ目を向け、地球人として行動できるようになってほしいと思っていた。授業などで留学先や旅先での話をすると、子供たちの目がキラキラ輝く。その輝きを、パラグアイとの出会いを通してより強めてほしい、もっと世界に目を向けて視野の広い人間へと成長してほしい、子供たちと世界をつなげる架け橋となれるような人間になりたいと思い、今回の研修に臨んだ。パラグアイでは、日本の忙しい毎日ではあまり感じることのできない人の温かさや思いやりに触れ、人との出会いに感謝する機会がとても多かった。現地の言葉が十分に話せない私たちに対して、積極的に話しかけてくれたり、とびっきりの笑顔と、ありったけのおもてなしをもらった。この「心の豊かさ」について、自身の経験を共有し、一緒に考えたいと思う。異文化理解を通して、自分の日常生活で大切にすべきものは何かをふりかえり、自己肯定感を高められるような実践ができればと考えている。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

初日のブリーフィングで、現地 JICA 職員の竹村さんより、「パラグアイにきた人は、絶対パラグアイを好

きになる。だが、どこが好きかと問われると、うまく言葉にできない。」との言葉があった。その言葉通り、研修が終わるころにはすっかりパラグアイが大好きになっていた。それはなぜか。私は、その答えは「人」にあると思う。研修における訪問先では、どんな場所でも人々の笑顔と優しさに囲まれていた。例えばサン・ミゲル特殊教育センターでは、朝からたくさんの量の大きなパンを焼いてくれて、コーヒーと一緒にもてなしていただいた。これだけのパンを作るのに相当な労力と時間がかかっただろうと思うと、とてもありがたく感じる。お土産でいただいたパンは、残念ながら全部食べ切れなかったが、先生の思いが込められていた分、とても美味しかった。行く先々で出会った人たちの笑顔と温かさこそが、この国の一番の魅力であると思った。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

日本とパラグアイのつながりを話すうえで欠かせないのが、日系社会の存在である。今年、日本人がパラグアイに最初に移住してから80周年になり、多くの記念行事が行われている。今回訪問させてもらったイグアス日本人会では、東日本大震災の時、「豆腐百万丁計画」を立案された福井さんのお話を聞くことができた。「同じ日本人として何か支援をしよう」と思い立ち、パラグアイでは家畜のエサとして作られている「大豆」を使おうと思いついた。他の地区の日系人を巻き込んで大豆を送って、日本で豆腐に加工し、東北へ届けた。その情熱と熱意に満ちた話を聞いて、地球の裏側という遠く離れた場所においても、「心はひとつ」なのだなと感じた。また、いくつかの現地学校を訪問してもらい、子供たちと交流することができた。こちらの授業を心から楽しんでくれたり、技術協力の話からアニメについてなど、日本について知っていることを話してくれたり、友達を大事にしたり・・・などの姿は日本で見ている自分の生徒と変わりがなく、素直な子供たちに心癒された。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

環境保全に関しては共通の課題であると感じた。イグアス湖周辺の環境を守って、安定した電力を供給できるような体制を作るプロジェクトがJICAの技術協力のもと実施されている。パラグアイの電力会社に働きかけて、湖周辺の農家に今ある環境を守ることが長期的にみて必要だということを地道に伝え、植林活動を行っている。モデル農家のシシリアさんが言っていた「どうしたら自然を守れるか。」を私たちも考え、行動できるようにしたい。

また、伝統民芸の後継者不足問題は、日本にも存在する。「ニャンドゥティ」は「蜘蛛の糸」という意味で、細くてカラフルな糸を麻などの布に縫い付け模様を作り、完成したら台紙から取り外す。大きいもので2か月はかかる。すべて手作業で時間と労力がかかる作品である。ただ市場価格はほとんどが糸代で、収入にはならない。職人たちは個人で製作しており、全体を管轄する組織は収入面までをカバーできず、後継者が不足している。日本も守るべき伝統芸能・民芸品は多くある。それぞれのアイデンティティーを守るための取り組みが必要だと思った。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

技術協力は2種類あって、技術そのものを教えるものと、価値観を教えるものがある。イグアス湖の流域を守らないと、長期的に安定した電力供給ができなくなるから、環境保全が大事だ、という価値観を電力会社に訴えたという話を聞いて、こういった形の支援もあるのだと驚いた。「価値観」は文化によって異なるし、無理に押し付けるようなことをするとその国の文化を壊すことにならないかという危惧もある。しかし、長期的なスパンで考えると必ず必要になる概念であるので、そこを見越した活動をしているJICAの活動を誇らしく思った。

今後あるといいなと思ったことは、伝統民芸に関する支援である。ニャンドゥティ工房を訪問して、その色鮮やかさと繊細さに更に虜になった。工房の方から、個人で作っている職人が多くて後継者が減っていること、

価格のほとんどは糸代で収入としては不十分だという話を聞きいた。日本においても、伝統工芸品の作り手や伝統芸能の後継者不足は問題となっている。この素晴らしい伝統を守るための支援ができたらと思う。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

② 青年海外協力隊（障害児・者支援）活動／サン・ミゲル特殊教育センター [清水／市江]

このセンターでは、幼稚園～小学校低学年ぐらいのさまざまな障害のある子供たちが学んでいる。校長先生は、アスンシオン以外の地方で、はじめて特殊教育センターを創立された方である。創立当初は中央政府や地域から偏見の目で見られていたが、スポーツや文化祭などの交流活動を重ねて認められるようになったそうだ。校長先生が真剣に話す姿を見て、ここまでの苦労をうかがい知ることができた。ここでは、青年海外協力隊で活動されている渡辺さんと一緒に、生徒と交流を行った。校庭でぶどう、いちご、バナナの3グループに分かれてのダンス対決。人気の曲（通称「ピキピキ」）がかかると自然と体が動いて、スペイン語が話せない私たちでも自然と子供たちと触れ合うことができた。渡辺さんの流暢なスペイン語の指示と、生徒を引き付ける彼女自身のパワフルさがとても印象的だった。センターの先生たちとの交流では、先生お手製のパンやマテ茶をいただいた。最後に、お礼として「ともだちになるために」をスペイン語で初披露した。子供たちの楽しそうな笑顔と先生方のおもてなしに感謝した1日だった。（市江文奈）

⑦ イグアス日本語学校 [市江／村田]

福岡旅館から10分ほど石畳の道を歩いて学校へ。小学部・中学部・高等部の子供が通っていて、家で日本語を話すかによって、国語コースとラパーチョコースに分かれていた。全校生徒が集まる朝礼、教室の掲示物、図書館、放課後の掃除、終礼と、日本の学校と全く同じだった。地球の裏側でこんなにも日本を感じられたのは、日本文化を大切に守っている日系人の方々の努力のおかげである。中には、日本風の躰のためにこの学校に入学させる人がいるぐらい、保護者と地域のサポート体制は手厚い。子供たちは一生懸命勉強し、日本語能力検定試験を受けて日本に留学できることを目標にしている。私は高等部の生徒と交流の時間を持ち、パラグアイの学校事情や彼らの大切なものを聞いた。「家族」と真っ先に書き、笑顔で写真に納まる姿は、日本の高校生と変わらないなと感じた。子供からたくさんパワーをもらった訪問だった。（市江文奈）

⑨ パラグアイ人宅でのホームステイ [全員]

最初、英語の通じない家庭でホームステイなんてどうしようと不安だった。パラグアイに着いてから、言葉の通じない不安を学生以来久しぶりに感じていた。到着してすぐ、お母さんと庭先で会話。たくさん話してくれるのに殆ど理解できなくてとても悔しくて悲しくて、このままじゃ飽きられてしまうと不安になった。でも、お母さんは笑顔でずっと話しかけてくれた。その心の広さは、今振り返ると尊敬に値するぐらい感謝している。お父さんはパン工場を営んでおり、「家族に」とお土産に大量のコキートをくれた。庭でテレレをしながらゆっくり流れる時間に癒された。大切なものを聞いたときに「家族も大事だけど、君たち2人も大事だよ。」と答えてくれた笑顔を思い出すと胸が熱くなる。しっかりもののお姉ちゃん、私のつたないスペイン語をいつも笑顔で聞いてくれた。遊び盛りの妹ちゃん、お父さんに大切なものを聞いているとき絵を描き始めたなどと思ったら、私たち2人を描いてくれていて、思わず抱きしめた。言葉に頼らなくても、心で通じ合えると改めて気づかされたし、ミルタさん一家が帰る際悲しんで涙を流してくれる姿に、パラグアイ人の温かさ、ホスピタリティーに深く感謝した。（市江文奈）

⑫ 青年海外協力隊（小学校教諭）活動／メルセデス・ミルトス小学校 [田原／市江]

坂が多い地域のため、段差が多く、運動場もガタガタで小石につまずきそう・・・そんな中でも子供たちの笑

顔と先生たちのパワーはあふれていた。到着してすぐ、校長先生が全校生徒を集めてくれて歓迎してくれた。各クラスを訪問したのち、3年生と貨物列車やぱっくんガエル作りをして遊んだ。日本語で説明しているのに、一生懸命牛乳パックでカエルを作ってくれた女の子の喜ぶ様子が忘れられない。教員との意見交換では、当初の予定より多くの先生が、勤務外の時間にも関わらず残ってくれた。ここで活躍されている青年海外協力隊の都倉さんの話の中で、「パラグアイの人たちはいい意味でルールを破る。違うときは違うと言う。ルールが絶対でない分、自由な発想をする。」ということを知った。日本の学校では「ルールを守りなさい!」と指導することが多い私。パラグアイのこの、ゆったりした雰囲気は、そのルールに対する概念の違いも少なからず影響しているはずだと感じた。(市江文奈)

⑩ シニア海外ボランティア（電気・電子機器）活動／カルロス・アントニオ・ロペス職業訓練校 [市江／田原]

バスで到着すると、校長先生をはじめ多くの先生が私たちを出迎えてくれた。麦わら帽子と扇子、交流会場には「ようこそ いらっしやいませ」の文字と、パラグアイと日本の国旗。先生方のありったけのおもてなしに感動！ここでは、30年以上前日本から持ってきた機械を大事に使って、建築、自動車工学、溶接など様々な工業・電子分野の勉強をする学生がいた。また、シニア海外ボランティアの方が3名活躍されていて、専門性高い授業を通して日本の技術を学生たちに教えていた。各科を見学後、学生と交流の時間がもてた。将来の夢を聞いたら、ある学生が、「私は仕事をして、家族だけでなく多くの人を幸せにしたい。」と書いてくれた。彼女のまっすぐな気持ちに心打たれた。交流も終わりの時間に差し掛かった時、ある男の子が「先生の笑顔がとても印象的だ」と言ってくれた。その言葉がとても嬉しく、笑顔は言葉を超える！と改めて気づかされた。(市江文奈)

⑪-2 ランパレの丘など [村田／市江]

アスンシオンから30分ほどにある丘には、大きなモニュメントがある。パラグアイの初代大統領やその父親などの銅像が立っていて、そこから360度見渡せるようになっている。まずは景色に感動！アスンシオン側はピンク色のラパーチョが至る所に咲いていて、晴れた空に、緑とピンク、そしてパラグアイ国旗が風に吹かれて揺れている光景に、とても感激した。ただ、違う角度に目を向けると、最貧困カテウラ地区が見えた。後ほどバスで近づいてみると、未舗装の道路、家の壁はもろく、ゴミであふれた庭先、多くの淀んだ水たまりなど、首都のアスンシオンと比べると格差を感じずにはいられなくなり、絶句してしまった。この地区をどうしていくかでパラグアイの今後が決まると感じた。首都でもこのカテウラ地区でも、同じように子供たちは楽しそうに遊んでいる。この子供たちの将来を考えたときに、優先すべきは経済発展なのか、格差是正なのか・・・考えさせられる光景であった。(市江文奈)

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- 南米は冬でも蚊が飛んでいます！虫よけ対策の準備を。
- 相手に渡す名刺は、日本語とスペイン語両方で作ると喜ばれます。英語のものを使ったが、英語が全くと言っていいほど通用しないので、挨拶やよく聞く質問など、ある程度話せるよう準備しておくことと現地でコミュニケーションが取りやすいです。
- 現地で見学させてもらう場所の情報は、事前にしっかりと頭に入れた方がいい。説明ももちろんしていただいたが、より深い観点から聞けるように、移動時間などを有効に使う。
- とにかくパラグアイは気温の差が激しいです。暑いときは半袖で過ごしたいし、寒いときはヒートテック、ダウンジャケットを着てないと凍えるぐらい。荷物が多くなるけど、準備しておくべきだと思います。

- 交流で行う授業はもちろん事前に準備をするのですが、5～10分など微妙な時間が空いてしまったとき、現地宅でホームステイ中に言葉以外でのコミュニケーションを図るとき、一緒に遊べる遊具をいくつか用意すると思います。紙風船で遊んだり、シールをあげたり、折り紙をしたり、ちょっとした遊びができるものは持ち歩くとよいと思います。
- 体調が悪くなったらすぐ言いましょう。私はバスで移動中急に腹痛に襲われ、次の研修先につくまで我慢しようと思ったけどできず・・・途中で休憩を入れてもらいました。

6. その他全般を通じての感想・意見など

今回この研修に参加する機会を与えてくれたJICA、NIEDの方々には本当に感謝しています。現地では、ほんとに「一生に一度だな」と思える出会いが多くあり、貴重な体験をすることができました。優しさあふれるパラグアイの方々、様々なサポートをしてくれたJICAの方々、たくさんの愛情をくれたミルタさんファミリー、研修先で活躍されている協力隊の方々、愛するエリカさんとグスタボさん（ファミリーにも!）・・・ほんとに出会えてよかった。そしてパラグアイメンバーにも大感謝!!

この体験や出会い、思いをこれから生徒とシェアし、考えていきたいと思っています。

ROHAYHU PARAGUAY♥

以上

